

〈砂場〉の歴史(3)

— 明治期の幼児教育施設における〈砂場〉のルーツ —

笠 間 浩 幸

(北海道教育大学釧路校)

1. はじめに

これまでわが国の幼児教育施設における〈砂場〉の歴史について以下の点について報告を行ってきた。

①わが国の幼稚園における〈砂場〉の普及は明治30年代後半以降に本格化し、大正10年頃までにその設置は当然のものとなった。(1992: 第45回大会)

②明治30年代、硬直化した恩物主義保育からの脱皮が幼児教育の課題となっていたとき、子どもの自由で自発的な遊びを許す〈砂場〉はその新しい保育の象徴としての役割を担った。また、〈砂場〉の紹介と普及には東京女子高等師範学校の中村五六、東基吉らが大きな役割を果たした。(1994: 第47回大会)

上記①に関しては、多くの文献・資料をもって確認することができた。②については、「随意遊戯」や「自己活動」といった新しい主張を展開した中村や東の著書にある〈砂場〉の記述をもって上記のような結論を得た。

しかし、そもそも彼らはどのようにして〈砂場〉という、当時においてはまだ一般的ではない遊び場を知っていたのか。今回はこの点を課題として残したが、本報告ではこのことに関する仮説を提起して考察を行い、日本の幼児教育施設における〈砂場〉の歴史に一定の結論を示すことを目的とする。

2. 課題の整理

日本の幼児教育施設における〈砂場〉の歴史を紐解く上で、明治31(1898)年の「幼稚園庭園設計方」は、公的に初めて〈砂場〉が登場した文書として重要である。これは大阪府から照会を受けた文部省が幼稚園の庭園の造り方について回答したものであるが、ここに「砂場(若干ノ地積ヲ画シテ砂ヲ盛り以テ幼児ノ砂遊ニ充ツ)」とあった。そしてこの情報は東京女高師から得たものであるとも書かれている。

だが、翌32年に文部省が出した幼稚園の設置基準ともなる「幼稚園保育及設備規程」には〈砂場〉は盛り込まれていない。文部省としてはまだ、この遊び場の十分な理解には到達していなかったのである。

では、東京女高師の関係者はどうして〈砂場〉についての情報を持っていたのか。〈砂場〉は彼らの「発明」なのか、「伝播」なのか。このことこそ本報告で解明したい課題であるが、筆者はこれをアメリカからの「伝播」ではなかったかと考えるものである。

3. アメリカにおける〈砂場〉

[〈砂場〉と児童公園の歴史]

1885年はアメリカの児童公園の歴史上、画期的な年である。このことはアメリカのレクリエーション運動の古典的研究、C. E. レインウォーターの著書⁽¹⁾に詳しいが、これを味わいのある大屋靈城の翻訳から引用したい。

然るに1885年の夏に成つて米の Marie E. Zakusseuska と伝ふ婦人がベルリン見學中に彼地の公園の中に砂山が作つてあるのを見た。而もその砂山には毎日々々富賤の別なく澤山の子供が集まつて巡査の指揮監督のもとに楽しく喜戯して居るので大いに感激して郷里の友人であり當時の衛生協會の會長の椅子にあつた Kate 婦人(ボストン: 筆者注)にこの由を詳細に報告してアメリカにもこの種のを試みてくれと依頼した。婦人は直ちにこれを West End の幼稚園及 Parmenter Str. の教会内に試設した。この企ては幼稚園では兒童が幼少で砂を目の中などに入れるので成功せなかつたが教会のほうは熱心な指導者が毎日付近の子供を集め十四五歳位までの大きな兒童が盛んにこれを利用して好い結果を擧ぐる事が出来た。

(大屋靈城『計畫・設計・施工 公園及び運動場』1920. pp. 196-197)

〈砂場〉はボストンでの成功をもって数年後にはニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィア等の主要都市に普及をみた。この流れは〈砂場〉の他にブランコやシーソーなどの遊具を加えながら、全米におけるプレイグラウンド運動として展開した。実に〈砂場〉はアメリカにおける児童公園の発祥であったのだ。

ところで上の大屋の引用から次の2点に注意しておきたい。

i. アメリカの砂場もその起源はドイツであつたということ。筆者はすでにフレーベルの幼稚園に〈砂場〉はなかったことを報告しているが(第45回大会)、それではドイツの〈砂場〉はどのようにして誕生したのかという疑問が出てくるが、今回は保留とする。

ii. 當時のプレイグラウンド運動というのは、「衛生協会」ということばかりも伺えるが、今日でいう余暇事業などというものではなく、貧しく不衛生な産業都市のスラム街に放置されている子どもたちをいかに救い出すかという社会改良の運動として展開していたということ。「遊び」によるエネルギーの放出によって、子どもの非行を防止し、健全育成に導くという願いが児童公園の出発点だったのである。

[今日のボストン West End 地区 Parmenter Str.]

およそ 110年前にあったといわれる、パーメンター街の教会の〈砂場〉は現在どうなっているのか。筆者は昨年3月に現地を訪ねた。

そこには1892年に建て直されたという「ノース・エンド・ユニオン」という古いレンガ造りの建物があり、現在でも地域のコミュニティ・ハウスとして、保育センター、職業訓練、成人教育の場として使用されている。通りに面した建物の壁に1枚のプレートがはめこまれており、この地こそ全米最初の監督者付きプレイグラウンドであったことが記されている。

下の写真は散歩から帰って建物に入る子どもたちで、左端の中うえのあたり、窓の間にプレートが見える。



4. アメリカの砂場と日本の砂場の関連

100年前のアメリカにおける児童公園設置の運動は日本にどのような影響を与えたのであろうか。

日本の最初の西洋風公園は明治36(1903)年の日比谷公園である。ここには約1000平米の児童公園が設けられ、円木鉄棒や回転塔、少年用ブランコなどが設置されている。ここへの〈砂場〉設置の有無は残念ながら不明であるが、東京女高師の関係者はすでに日比谷公園完成の5年前に〈砂場〉の案を文部省に提案していたのだ。もっとも、実際に造られた日比谷公園は第9案目として明治33年には設計図が完成していたのだが、それでも2年は早いことになる。当時は欧米の公園事情がいろいろなルートで入って来ていたと思われるが、その中でも東京女高師関係者はいち早く児童公園の〈砂場〉に関する情報を取り入れていたのではないだろうか。

ここで注目したいのが、東基吉の回想言である。彼は言っている。「...雑誌はこれも米国出版の Kindergarten Review と Kindergarten Magazine の二種が毎月来ました。夫で毎日そんな書物や雑誌を読破して、幼稚園に関する知識を収得することに努めました。」(『明治教育文庫』巻 p. 205)

“Kindergarten Review”とは1888年に発刊された幼児教育雑誌で、後に“Kindergarten Magazine”と改題し継続発行されたものである。

5. “Kindergarten Magazine” 1897年11月号

1897年11月号の“Magazine”は、表紙口絵にノース・ウェスト大学のセツルメント・グループの写真が掲載され、M. E. Sly による「シカゴのプレイグラウンド」という巻頭論文に始まる。ここに児童公園の遊具とそこで遊ぶ子どもたちの写真が紹介されているのだが、最後のページに「IN THE SAND PILE.」と題して下の写真が掲載されている。



『Kindergarten Magazine』にはこの号の前にも幾つかの〈砂場〉に関する小論が載っていたが、これらの雑誌論文を「読破する」ことが東京女高師関係者の「仕事」であったとするなら、まさしくここに文部省への情報の流れを見ることができのではないだろうか。ましてや、上記論文と写真は〈砂場〉のビジュアルな紹介として迫力があり、1897年11月号という時間の関係からも、明治31(1898)年5月の「幼稚園庭園設計方」とは大いに関連があったのではないかと推察される。ただし、この時はまだ東基吉は東京女高師に赴任していなかったことから、文部省への情報提供は当時の附属幼稚園主事、中村五六によるものではなかったかと考える。

6. 考察と課題

明治期、日本の幼児教育はアメリカの影響を強く受けながら発展してきたが、今日の幼児教育施設にはその設置が当然のものとなっている〈砂場〉についてもその源流はアメリカの児童公園設置の運動に溯ることができると考える。また、その情報の窓口となったのは中村五六ら東京女高師関係者であり、後年彼らの著作に盛んに〈砂場〉の記述が見られるのもこのような理由によると思われる。ここに日本の幼児教育施設における〈砂場〉の普及と発展の歴史を結論づけたい。

ただし、これまで保留にしてきた次の二点を今後の発展的課題として挙げておく。まず、〈砂場〉の起源としてのドイツの問題。そして、日本の明治20年代にあったと言われている岡山市深柢幼稚園の「幻の砂場」(第45回大会報告)について。

- (1) Rainwater, C. E. “The Play Movement in the United States” 1921